

大日本体育協会の発足と日本武道への省察

1909年の春、クーベルタン男爵 Baron de Coubertin の友人で駐日フランス大使だったゲラールは当時東京高等師範学校（筑波大学の前身）の嘉納治五郎校長が、講道館を開設して柔道を指導していたのみならず、高等師範学校に文科と理科の教員養成の外、文科兼修体操専修科という課程を特設して、優秀な体育教員の養成に力をそそいでいたのを見て、白羽の矢を立てて、オリンピックに参加をすすめた。

嘉納治五郎先生が東洋人として最初のIOCの委員に任命されたのは1909年5月伯林で開かれたIOCの決定であった。然しIOCの会長クーベルタン男爵と第5回のオリンピック開催地スウェーデン政府から、嘉納治五郎宅に、日本の参加を正式に勧誘して来たのは、明治43年（1910）のことです。

嘉納治五郎先生が首都ストックホルムで開催の第5回オリンピック大会に参加の腹を固め、推進母体を作ろうと考えて、文部省と交渉したが埒（らち）があかず、私立の日本体育会と折衝したが、会の目的に合致しないと拒絶される。

そこで新団体をつくり、オリンピック参加の日本選手を選出する全国的統括母体にしたいと考えて、浜尾新東京帝国大学学長、高田早苗早稲田大学総長、鎌田栄吉慶応大学総長と折衝の結果その賛成を得て、明治44年（1911）の春、一橋の学士会館に第1回の会合を開いた。

会議の議題は、

- 1、各種運動競技を普及発達せしむる方法
- 2、第5回国際オリンピックに参加する

ことであった。

その後、明治44年（1911）7月、日本最初の体育団体である大日本体育協会（現：日本体育協会）が組織され、嘉納治五郎先生は推されて、その初代会長に就任した。

嘉納治五郎師範は自分が苦心し産婆役をして作り上げた大日本体育協会に、何故講道館を率先して加入させなかったのだろうか。その意中を忖度（そんたく）するに、多分柔道を他の運動（スポーツ）競技と同一視することなく、画然と区別していたからではなかろうか、常に道の根底の上に立ったものが、日本伝講道館柔道であり、その原理は「精力の善用」であり、その理想精神は「自他共栄」であると説かれていた。

日本の無形文化財（日本武道の教中）に、「飽くまでも完全一本を先取することを以て勝負決定の根本とした」とあることを、謙虚に思索して、試合審判規定を改竄（ざん）する事なく、正しい技の低下に拍車をかけないよう活眼を開いて遺教に学ぶべきです。そうすれば必ず坦々たる大道が眼前に展開するであろう。又、日本武道の中にあつて優れた意義と価値を、外国人に理解させるためにも、われわれ日本人が、日本に伝わる正しい「武道の精神と技」の体得者となり、日本武道の遺教を遵守実践すべきです。

福島県スポーツチャンバラ協会

平成19年6月17日(日) 全日本大道館連盟 会長 堀田 満